舞台の音楽の一小感

三嶋章道

近頃、新しい劇が上演される時、それが多少、神秘的とか、又は象徴的とか、又は繪畫的の装置を用ひたりする演出をとるとき、すぐ音楽をいれてやる事が一つの流行のやうに成って来た。けれどもこれは隨分考ふべき問題である。と思ふ。劇に音楽をのれると云ふ事は、俳優の藝の拙さを、劇にあまり理解のない歡宋にごまかせる事がある。それ故ふは素人劇團ふでは これをやるのである。そして甚しきに到っては寫実的の劇の演出にまで、甘いうづ、シーとにふったりすると すぐ音楽を――ヴァイオリンふでもバックの後ろでやったりする。

私は今、劇の演出に、絶對的に音楽をのれてはいけふいと云ふのではふり。神秘的、象徴的の劇に、音楽をのれて演出する事は、非常に效果を強める事がある。音楽のために その演出全體が生きる事もある。しかし、それ